

飛び出せ 学校

この新聞は、杵築市大田小学校の6年生(神田文聡教諭=7人)が、大分合同新聞社の記者と一緒に作りました。

大分合同小学生新聞

発行者
杵築市
大田小学校
6年生

大田の豊かな大自然



私たちの住んでいる杵築市大田は、豊かな自然に囲まれた国東半島宇佐地域に位置しています。この地域は、「世界農業遺産」に認定されています。世界に認められた美しい自然と、それを生かした農業について知ってもらいたいと思い、この記事にまとめました。一生懸命に書いたので、ぜひ読んでください。



杵築市大田白木原で農業を営んでいる河野幸信さん(73)は、約50年間苦闘を重ねながらシイタケ栽培をしています。収穫量は、ミカン箱で約50箱分。それを大切に育てられたシイタケと大田の農業を支えるため池



クヌギの木はシイタケ栽培にも使われています。シイタケをたくさん食べると、シイタケの生産量が増えます。すると、栽培に必要なクヌギが増え、クヌギ林が酸性炭素を酸素に変えて、地球温暖化を防ぐことができるのです。



世界が認めた循環システム

私たちの住む国東半島宇佐地域は、「世界農業遺産」に認定されています。その理由を知るために「世界農業遺産の先生」として知られている林浩昭さん(62)に話をうかがいました。林さんは、水の循環システムとクヌギを使ったシイタケ栽培について、シイタケを食べることで地球温暖化を防ぐことができるということについて教えてくれました。国東半島宇佐地域には、多くのため池があります。このため池は、クヌギ林のおかげで、水が一定の量に保たれています。ため池により田畑がうるおい、農作物がよく育ちます。使われた水は海に流れていき、海産物をよく育て、雨として再び山に戻り、ため池の水となります。このような地域のシステムを受け継いできたことが、世界に認められたと教えてくれました。



私たちは、世界農業遺産に関する農業について知るために、石丸宮農集団代表の安東勇次さん(62)に、米づくりについて話をうかがいました。安東さんが米づくりの中で大変だと思う

ことは、土づくりや水管理だそう。土には、たい肥などをまぜるそう。しかし「たい肥を入れすぎると、土が重くなり稲が倒れてしまう」と話していました。米づくりがうまくいかない年もあるそうです。だから、毎年毎年、白々勉強をしているそうですが、「米づくりには正解がない」と言っていました。そんな安東さんが、米づくりを続けているのには理由がありました。それは、米を買ってくれた人に「おいしかった。また作ってくれ」と言われるからだそうです。「お米づくりは大変だけど、ほめてもらえ



ると達成感を感じるからやめられない」と話してくれました。だから、安東さんは今日も米づくりにはげんでいるのです。



2020年から新型コロナウイルスの影響で開催されていなかった「どぶろく祭り」が、昨年3年ぶりに開催されました。白鬚田原神社では、昨年と同様に、年配の方から若い方まで、幅広い世代の方々が神社を訪れました。造ったどぶろ

く量は、これまでと比べて半分ほどに減ったそうです。宮司の河野真二さん(50)は、「造る量が減ると、量の調整が難しい」と話していました。どぶろくを造るには、20人ほどの人数が必要だそう。特に大変な作業は、泊まり込んで、どぶろくがあふれないように管理することだということです。とても難しく、経験のいる作業なのだと話していました。どぶろく祭りは、農作物の豊作を願い、神様に感謝するお祭りです。河野さんは、その祭事を取り仕切る責任者で、祭りが無



事に終えることができたときに、達成感を感じるのだそうです。みなさんもぜひ、大田の「どぶろく祭り」を訪れてみませんか。

山を育てる林業



私たちの大田小学校は山に囲まれています。その山にはたくさん木が生えています。その木を管理しているのは誰でしょうか。それは、林業という仕事をしている人たちです。私たちが住んでいる国東半島は、世界農業遺産に認定されています。その世界農業遺産に深い関わりのある林業について、福田林業代表取締役の福田明彦さん(49)に話をうかがいました。林業には「春さし」という春に苗を植える作業と、「秋さし」という秋に苗を植える作業があります。春さしや秋さしをする季節はとも忙しいそうです。他にも、一年で一番大変な時期は夏というこも教えていただきました。ハチが出たり、熱中症になりやすかったりするから大変そうです。また、普段はほとんど機械で木を伐採するけれど、斜面の木だけはチェーンソーで切るというこも教えていただきました。



福田明彦さん

私たちが作りました



新聞ができるまで

杵築市大田小

古里の魅力伝えたい



⑤記者から取材に必要な道具や写真の撮り方などを教わった(2022年5月19日) ⑥福田さんに木を育てる仕事について聞いた(8月30日) ⑦グループでより良い見出しについて議論した(12月2日)

は、米を作ってほしいという消費者の声が励みになっているという安東さんの思いを、熱心に書き取った。白鬚田原神社の河野真二宮司(50)には「どぶろく祭り」について尋ね、

1300年以上の歴史に思いをはせた。福田明彦さん(49)からは、植樹や木の伐採を通して、山を育てる「林業」の重要性を聞いた。地域のこを取材した児童は、大

分合同新聞社ニュース編集部の佐藤晋記者(41)から見出しやレイアウトの付け方を学び、地元の自然や人々のこを伝えたいという熱い思いのこもった新聞を完成させた。

この企画は小学生(主に5、6年生)が、地域の魅力や課題を取材し、新聞にまとめる作業を通して古里を見詰め直すことを目的としています。問い合わせは大分合同新聞社地域連携室「飛び出せ学校」係へ。☎097・538・9729、Eメールnie@oita-press.co.jp



新聞づくりの様子をご覧ください